令和２年度　山口大学教育学部附属光学園（光小学校）学校評価書　（校長　森本　忠寿）

1　学校教育目標

【教育目標】
広い視野をもち，未来の社会をたくましく切り拓く人間の育成
【目指す子ども像】
本質を見極めようとする子（ねばり強く考える子）　多様性を尊重し，協働できる子（自他を大切にできる子）　社会との絆を深める子（地域に愛される子）

2　現状分析（前年度の評価と課題を踏まえて）

⑴　学力の向上
子どもの学力は，良好な状況にあり，「主体的・対話的で深い学び」の具体的な授業づくりの一層の充実が期待される。主体的に取り組める家庭学習の改善に昨年度着手したが，子ども・保護者への浸透は不十分であり，本年度の課題である。

⑵　心の教育の推進
子どもの自己肯定感は概ね高く維持されているが，中学校においては，課題の見られる学年もある。互いの違いを受容し，尊重できる集団の醸成を一層進めていく必要がある。小学校では，子どもの自己評価と保護者や教職員の評価とのずれ見られ，取組に課題がある。

⑶　健康・安全と体力の向上
インターネットの利用等にかかわる生活リズムの乱れ，体調不良が見られ，家庭との一層の連携が必要である。各家庭での取組の共有や，子ども・保護者への積極的な情報発信を通して，自身の健康・安全や体力への関心を高めることが課題である。

⑷　学部・保護者・地域との連携の強化
学部との連携では，小中間で評価に差が生じており，中学校での学部連携が課題である。小学校で実施している学校からのニーズに応じた短期プログラムの取組を中学校に広げていきたい。また，オンラインでの連携等，感染症対策の面からも連携体制を構築していくことが必要である。
地域連携では，学校運営協議会と教職員で共有した教育目標と子ども像を基にして，子どもの学校運営の参画を具現化していく。一人ひとりが主体となるような学校運営の改善が必要である。

⑸　業務改善の推進
昨年度まで進めてきた業務改善を継続する中で，子どもとの向き合い方の質を高めるとともに，附属学校の使命を果たす教職員集団の一層の醸成を図っていく。

3　本年度重点を置いてめざす成果・特色，取り組むべき課題

○　授業力や業務遂行能力の質的な向上を通して，子どもと向き合う時間の一層の充実を図る。
○　子ども・保護者・地域・教師が一体となった取組の充実を通して，協働的な学園風土の醸成を図る。
○　一人ひとりが考え判断する場を通して，自他の存在を大切にできる行動力の伸張を図る。
（学力）（心の教育）（健康・安全と体力）（学部・保護者・地域連携）（業務改善）

4　自己評価　／　5　学校関係者評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組（具体的方策）	評価基準	達成度	達成状況の診断・分析（年度末）	取組状況に関する意見・要望等	評価
学力の向上	思考力・判断力・表現力を確かなものにする学びの推進	○　主体的・対話的で深い学びについての実践の充実と情報発信 ○　子どもに育む資質・能力に特化したカリキュラムの深化充実 ○　個の特性に応じた指導改善	子ども・保護者アンケート（授業関連）の肯定的な回答 4（95%以上），3（90%以上），2（85%以上），1（85%未満）	4	〈児童 95.6%、保護者 95.1%〉 ・児童、保護者ともに高い評価であった。教職員評価も良好であり、授業に対する三者間の意識が、非常に理想的につながっていると言える。一層の授業研究に努める。	・コロナ禍の中、子どもが面白いと感じる授業がでたことは教師の授業力の向上につながっているはずである。引き続き、研鑽に励む。	4
	自ら学び続けることのできる家庭学習の在り方についての提案と実践	○　各学年の課題に応じた家庭学習方法の実践と検証 ○　子どもに育む資質・能力に応じた家庭学習方法の実践と検証	保護者アンケート（家庭学習・学力）の肯定的回答 4（80%以上），3（75%以上），2（70%以上），1（70%未満）	2	〈保護者 72.3%〉 ・前期とほぼ変わらない実態であった。家庭学習をより充実させるため、今年度配布した“家庭学習の手引き”の有効活用を図るなど、具体的な方策を講じたい。	・保護者は、子どもに対してどのような家庭学習の在り方を望んでいるのか、投げかけてみては（調査形式）どうか。	3
心の教育の推進	自他を大切にできる受容的な集団の醸成	○　道徳科の授業づくりを通した，子どもの変容の見取りと評価 ○　学校行事への主体的な取組を通した集団づくり	子ども・保護者・教職員アンケート（道徳科）の肯定的回答 4（95%以上），3（90%以上），2（85%以上），1（85%未満）	2	〈児童 90.7%保護者 88.4%教職員 98%〉 ・児童、教職員は 9 割を超えているものの保護者評価において数値が下がる傾向にある。学校生活の様子を、さまざまな手立てにより発信していくことも検討項目に加えたい。	・心の教育の上段と下段で基準数値はそろえた方がよい。・道徳の研修を進めていることは、HP 等からよく把握できる。	3
	集団意識を基盤とし，自治と誇りを基軸としたマナーアップ	○　登下校中や公共の場での態度の価値付けを通した，望ましい集団づくり ○　子どもの自治的な工夫・改善を通した主体的な取組の推進	子ども・保護者・教職員アンケート（規範）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	3	〈児童 95.8%保護者 89.7%教職員 93%〉 ・概ね良好である。“進んであいさつができる”の項目について、保護者・教職員評価平均が 80%と低い。来年度生徒指導面の重点努力目標のひとつに挙げたい。	・挨拶の在り方を、教員間で共通理解するとよい。SB の運転手など、子どもが学校外でお世話になる方々へ聞き実態把握をする	3
健康・安全と体力の向上	自らの生活の課題を意識し，工夫しようとする意欲・態度の育成	○　本校の実態に即した，早寝・早起き・朝ご飯の啓発，食育指導，保健指導，ネット利用の指導を通した，健康的な生活習慣や態度の育成	子ども・保護者アンケート（生活）の肯定的回答 4（80%以上），3（75%以上），2（70%以上），1（70%未満）	2	〈児童 84.9%、保護者 71.3%〉 ・項目によって、児童と保護者の意識の差が開く結果となった。携帯・ゲームの使用方法や時間など、粘り強く指導を繰り返したい。	・ノーメディアデーなどを作り（取組方を学年で決めるなど）、子どもや保護者の意識啓発に努める。	3
	安全に楽しく運動を楽しめる資質・能力の向上	○　運動場面を捉えた具体的な安全指導の充実 ○　体育科の授業や家庭生活での実践を通した柔軟性の向上	校内・校外での骨折 4（ 5 件以下），3（10 件以下），2（15 件以下），1（16 件以上）	4	〈今年度骨折件数：5 件〉 ・体育科において、柔軟性を高める指導を大学と連携して進めることができた。来年度も、継続して指導する予定である。	・現状を一層向上させる。体育科のストレッチ体操や山大との連携指導も引き続き実施する。	4
学部・保護者・地域との連携	学校と学部との連携を密にした教育研究の推進	○　9年間を見通した定期的な情報提供及び教育実践研究サイクルの構築	教職員アンケート（学部連携）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	2	〈教職員 80%〉 ・前期末評価から若干数値が落ちた。年度始め、指導案検討の際には大学とのかかわりの頻度が高かった。年間を通して指導助言を仰げるよう、研究部を中心に教員の意識啓発に当りたい。	・オンラインを使っての授業の在り方を幅広く模索し、付属校としての強みを生かす。	2
	学校と保護者，保護者と保護者のネットワークづくり	○　学校 web ページを活用した各種情報発信の充実 ○　非常変災等，学校の危機管理に関する共通理解と訓練の充実 ○　PTA，おやじの会への参加を通した保護者同士の絆づくり	保護者アンケート（PTA 等） 4（85%以上），3（80%以上），2（75%以上），1（75%未満）	2	〈保護者 79.1%〉 ・コロナ禍において、“保護者同士のつながり”や“PTA 活動への参加”の項目が伸びなかった。来年度は保護者来校ができるよう、工夫や対策を講じたい。	・交通立哨などのように、当番制でなくボランティア形式で負担感なく取り組むことが、息の長い活動につながる。保護者参加を前提の上で、どのような感染対策を講じるかを見出す。	2
	附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくり	○　学校運営協議会，子どもとの熟議を通したCSの充実 ○　附属学校の特性を生かしたCS機能の強化	4（子どもが参画した地域との取組），3（子どもが参画した学校運営協議会との活動），2（学校運営協議会の提案による新たな取組），1（学校運営協議会での熟議）	1	・委員の方と小中全教員による熟議を行えたことは、大変有意義であった。来年度は、さらに発展させていけるよう、企画していきたい。	・地域学習、人材を生かす・授業や活動の様子を紹介する。	2
業務改善	業務の見直しと効率化を通した働き方の改善	○　限られた時間内での子どもと向き合う時間の質の向上 ○　小中の同僚性の向上，組織内ネットワークの強化による業務の効率化	時間外労働時間の平均 4（42 時間未満），3（47 時間未満），2（52 時間未満），1（52 時間以上）	1	〈時間外労働時間年間平均 52.4 時間〉 ・前期 54.1 時間、後期 50.7 時間であった。校務分掌の活性化、会議の一層の効率化、小中それぞれの行事や特別活動の見直し、精選などを図る。	・電子媒体を上手に活用する。紙媒体、電子媒体での発信方法を選択できるようにしてはどうか。学校メールの有効活用も考える。	2

6　学校評価の総括（取組の成果・次年度への改善策）

〈取組の成果〉
・全般的に、児童の多くが授業に対して前向きに取り組んでおり、活発な意見交換や発表を行っている。コロナ禍において、参観授業は分散開催としたが、たくさんの保護者が来校しており、授業の様子を紹介することができた。
・運動会や附小祭などの学校行事では、オンラインにより児童の活動の様子を公開するなど、新たな情報発信の手法を開拓することができた。
・本校児童の身体面の課題である柔軟性の低下や、コロナ禍における運動不足克服の手立てとして、体育科において山口大学と連携した“柔軟性向上、山大連携プログラム”を実施した。
〈次年度への改善策〉
・各校務分掌の活性化と連携を図り、児童の日常の学校生活（授業、あいさつなどの心の教育、集団づくりなど）をよりよく創造する体制を構築する。
・コロナ禍における行事や PTA 活動の在り方を模索し、保護者の参観を可能にする手立てや、保護者間のつながりを広げる方策を講じる。
・小中一貫校として、小中行事の見直しや精選、実施期日等のすり合わせなどを行い、子どもにとってより有益となる教育活動にするとともに教職員の業務改善にもつなげる。